淑大看栄院看紀要 B.S.N.N.G.S.N.ShukutokuU Vol.1, P13-20, 2023

研究報告

沐浴における児の固定・支え方についての検討

榊原清美　伊藤奈津子　河野洋子
淑徳大学看護栄養学部看護学科

Examination of a Method of Fixing and Supporting an Infant During Ablution

Kiyomi Sakakibara, Natsuko Ito, Yoko Kohno
School of Nursing and Nutrition, Department of Nursing, Shukutoku University

要旨
目的：本研究の目的は、児頭を把持し手掌全体で頭部・頸部・背部を固定する沐浴方法Ａと左前腕に新生児の頸部と児頭を乗せて支え、左肩関節を掴んで固定する沐浴方法Ｂの２通りの沐浴方法について、安全性や安楽性及び洗いやすさについて比較し検討することである。
方法：Ｃ大学の看護学科２年次生16 名を対象とし、クロスオーバー試験により２通りの沐浴方法を実施中の動画撮影と、実施後に洗いやすさ、安楽性、安全性の観点から質問紙調査を行い、比較・分析した。
結果：洗いやすさと安楽性では、「固定のしやすさ」、「固定している指の滑りやすさ」、「固定している指への負担」、「支えている腕の疲れ」の得点で有意差が認められ、学生は沐浴方法Ａの方が沐浴方法Ｂよりも固定が難しく感じていた。安全性では「落としてしまう不安」の得点で有意差が認められ、沐浴方法Ａの方が沐浴方法Ｂよりも新生児を落下させてしまう不安を強く感じていた。一方、沐浴方法Ｂは沐浴方法Ａのように児頭を把持しないため、児頭を確実に固定できず、洗う際に頭部が揺れてしまう「児頭の不安定さ」を感じていた。
結論：沐浴方法Ａと沐浴方法Ｂ共に沐浴方法の問題点が明確になり、どちらの沐浴技術も習得過程が効率的に進むよう教授方法の改善に取り組むことが必要であると考えられた。

キーワード：沐浴、技術演習、看護教育
Key Words: ablution (bathing), technical exercise, nursing education

Ⅰ．はじめに

現在、本学の母性看護援助論Ⅲの沐浴演習では、沐浴の際の児頭の固定は左手で後頸部から背部にかけて広く支えるようにして児頭を固定し、その際、拇指と中指を新生児の左右の耳朶に当て、耳孔を塞ぐようにしながら手掌全体で頭部・頸部・背部を固定する方法で指導を行っている。しかし、学生の児頭の固定を見ていると、拇指と中指を新生児の左右の耳朶に当てられず、児頭を固定するのではなく、手掌に乗せているだけの状態である学生が見うけられる。また、指が徐々に滑り頸部を固定している状態で何度も児頭を持ち替えており、安全な児への技術提供ができない学生が多いのではないかと考える。学生からは、「固定しにくい」、「滑ってしまう」、「指がつる」など、沐浴の際の児頭の固定に対する苦痛の声が聞かれている。また、「滑ってしまい洗うのが大変」「頭が洗いにくい」などの声も聞かれている。

沐浴は、看護学生にとっては緊張と不安を伴う（伊籐，2009；加藤ら，2009）技術でもある。特に新生児の頭部の把持や固定は難しく（渡辺ら，2006）、落下の危険（荒川ら，2006；今田ら，2009；壇原，2010）が指摘されている。行光ら（2004）は、母性看護学臨地実習における医療事故及びヒヤリ・ハットの実態を調査し、医療事故及びヒヤ

リ・ハットを体験したと答えた看護学生は448人中35人（7.8%）、そのうち新生児を対象とした体験が22件（62.8%）であり、そのうち沐浴場面が７件（31.8%）と最も多く、その内容は頭の支え方の不十分さや手際の悪さからの低体温、緊張による手の震えなどであったと述べている。後藤ら（2015）は、学生は児頭を手で固定する方法と、腕で支える方法のいずれかを選択しており、教材の中の沐浴の技術には様々な方法があるという選択肢を示したことは、個別性に応じた技術を選ぶことにつながり効果があったと述べている。児頭を保持するのが困難な場合は、腕で支える方法として左前腕に新生児の首と頭を乗せて支え、上腕をしっかりつかんで安定させる方法（横尾，2016）が紹介されている。この方法は、新生児の左肩関節を固定し安定させると記述されてはいるが、実際のところ児の安定性が確実であるかは定かではないと思われる。

学生が沐浴の実施を苦に感じることなく、なおかつ児の安定性や洗いやすさを維持しながら沐浴実施が出来るようにするためにも、児頭の固定方法の安全性および安楽性について検討する必要があると考えた。

そこで、今回、児頭を把持し手掌全体で頭部・頸部・背部を固定する沐浴方法（以下、方法Ａとする）と左前腕に新生児の頸部と児頭を乗せて支え、左肩関節を掴んで固定する沐浴方法（以下、方法Ｂとする）での学生による沐浴の実施体験から、沐浴実施中の洗いやすさ・安楽性・安全性を評価・比較し、沐浴演習における学生への指導方法として方法Ｂの有用性を検討したいと考えた。

Ⅱ．研究対象と方法

１．研究デザイン

クロスオーバー試験による準実験研究デザインである。対象者を２群に分け、AB群には方法Ａ→方法Ｂの順で沐浴を実施してもらい、BA群にはその逆の順に実施してもらった。これにより、１回目の経験が２回目に与える影響を相殺できるとともに、各自が２通りの方法を経験できるため、主観的な相違を明確にできると考えた。

２．研究対象

Ｃ大学の「母性看護援助論Ⅰ」の履修者である看護学科２年次生98名のうち、自ら研究協力を申し出た学生17名（17.3%）であり、そのうちすべての質問項目において有効回答が得られた16名（16.3%）を研究対象者とした。尚、２年次生は研究依頼やデータ収集時点において、沐浴の技術演習の授業をまだ受けていない学生である。

３．研究期間

2022年４月～2022年８月

４．研究方法

１）対象者の募集方法

２年次生全員に講義終了後の５分程度を用いて、本研究の趣旨について文書を用いて口頭で説明し、研究参加への依頼を行った。研究参加を希望する学生からGoogleフォーム®にて研究参加の申し込みを受け、データ収集の希望日程などの調整を行った。データ収集日に再度研究の概要及び研究の趣旨、方法、個人情報の保護、研究協力しないことによって成績や大学生活に一切影響がないことなどについて充分に説明し、研究参加の同意を得た。

２）沐浴の実施方法

沐浴槽は母性小児看護実習室に備え付けられている２曹式の沐浴槽を使用した。湯は沐浴槽の８割程度入れ、沐浴に使用する石鹸は泡で出るポンプ式の石鹸を用いた。沐浴で使用するモデル人形はコーケンベビー男の子LM-026Mを用いて実施した。

(1) 沐浴を実施する前に一つ目の沐浴方法について、学生に対しデモンストレーションを行った。デモンストレーションは、手順書に則って実施した。

(2) デモンストレーション後、学生が沐浴を実施し、終了後には10分間以上の休憩時間を設けた。その後、２つ目の沐浴方法のデモンストレーションを行い、その方法で学生が沐浴を実施した。

３）データ収集方法

(1) 沐浴実施中の様子を撮影し、その動画からデータを収集し、動画記録用紙に記載した。

(2) 沐浴を終了するごとに、各沐浴方法についての無記名自記式質問紙調査を行った。

4）データ収集内容

学生が沐浴をしている様子を撮影した動画から、沐浴の所要時間やコーケンベビーを持ち替える回数のデータを収集した。

質問紙からは①基礎情報として、対象者の年齢、性別、新生児を世話した経験（見た、抱いた、おむつ交換、沐浴、着替え、あやす等）の有無、②それぞれの沐浴方法での洗いやすさ（頭部・左腋窩・その他、児の背部を洗うための体位変換の難易度）、③安楽性（身体的、心理的負担）、④安全性（沐浴中のリスク）について回答を得た。回答方法は、各質問に対して当てはまる程度を「1」から「10」までの10段階から選択する方式とした。

5）分析方法

動画および質問紙からの量的データは、沐浴方法AとBの洗いやすさ・安楽性・安全性の各項目の得点を対応のあるt検定（正規性がある場合）またはウィルコクソンの符号付順位検定（正規性がない場合）により有意差の有無を検討した。正規性の有無については、Shapiro-Wilkの正規性の検定で確認した。分析は統計解析ソフトIBM SPSS version24を使用した。

質問紙調査の自由記載の質的データについては、それぞれの沐浴方法の洗いやすさ・安楽性・安全性について具体的に記載されている部分に着目して抽出し、意味内容によって分類した。それらを沐浴方法ごとに対比させ、比較・検討した。

5．倫理的配慮

著者の所属する機関の研究倫理審査会の承認を得た（承認番号：N 21−04）。

本研究は教員が学生を対象に行う研究であるため、研究への参加において教員の強制力が働かないように単位の取得や成績とは一切無関係であり、研究参加・不参加により研究対象者が不利益を受けることがないことなど研究協力の任意性と撤回の保証、プライバシーの保護、匿名性の保障などについて依頼時に文書と口頭で説明した。研究参加については、学生の自由意思が損なわれないようにGoogleフォーム®を用いて行い、データ収集日に再度研究の趣旨について説明し、同意を得た。

Ⅲ．研究結果

1．研究対象者の概要

研究対象者16名の内訳は、女性が12名（75%）、男性が4名（25%）であった。過去5年以内に「新生児と関わった経験があるか」という問いに対しては、12名（75%）の学生が「経験がない」と回答した。同様に、乳児との関わりについては、あやした経験や抱っこの経験など何らかの形で乳児と関わった経験を持つ学生が増えたが依然として4名（25％）の学生が乳児と関わった「経験がない」と回答していた。

方法Aから実施するAB群が9名、方法Bから実施するBA群が7名となった。

2．沐浴方法による洗いやすさ・安楽性・安全性の得点比較（表1、表2）

1）洗いやすさ

表1の洗いやすさの項目で有意差が認められたのは、「固定のしやすさ」（P=0.013）、「固定している指の滑りやすさ」（P=0.005）であり、いずれも方法Aの得点が方法Bより高く、方法Aの方が難しいと感じていた。その他の「所要時間」、「児頭の洗いやすさ」、「腕の洗いやすさ」、「仰臥位から腹臥位への体位変換」、「腹臥位から仰臥位への体位変換」については有意差が認められなかったが、「所要時間」は方法Aの方が長くかかっており、「児頭の洗いやすさ」は方法Aの得点がわずかに高かった。一方、「腕の洗いやすさ」、「仰臥位から腹臥位への体位変換」、「腹臥位から仰臥位への体位変換」については方法Bの得点がわずかに高かった。

表2の「固定している位置が変化した」を見ると、方法Aでは11名（68.8％）、方法Bでは5名（31.2％）が変化したと回答しており、方法Aの方が変化した者が多かった。

動画で確認された「固定部位を持ち替えた回数」は、方法Aでは2回が1名、1回が3名、他の12名は0回であった。方法Bでは、全員が0回であった。

表１　沐浴方法による各項目の得点と検定結果

（n=16）

	項　目	方法Ａ	方法Ｂ	*P*値
洗いやすさ	所要時間	386.4 ± 65.1	358.2 ± 48.4	0.230a
	固定のしやすさ	6.4 ± 2.3	4.3 ± 3.2	0.013*b
	児頭の洗いやすさ	5.9 ± 2.3	4.9 ± 2.9	0.219b
	腕の洗いやすさ	4.6 ± 2.4	4.9 ± 2.6	0.710a
	固定指の滑りやすさ	5.5 ± 3.0	2.6 ± 1.9	0.005**b
	仰臥位から腹臥位	4.3 ± 3.2	4.8 ± 2.9	0.590a
	腹臥位から仰臥位	4.4 ± 3.0	4.9 ± 2.6	0.675a
安楽性	固定指への負担	7.5 ± 2.8	2.5 ± 1.9	0.002**b
	腕の疲れ	7.7 ± 3.0	4.6 ± 2.9	0.023*b
	腰の疲れ	2.3 ± 2.4	1.6 ± 1.2	0.072b
	緊張した	6.9 ± 2.8	6.3 ± 2.5	0.529b
安全性	落とす不安	7.3 ± 2.8	4.9 ± 3.2	0.004**b
	顔が湯に付く不安	6.3 ± 3.2	4.9 ± 3.2	0.108b

a: 対応のある t 検定，b: ウィルコクソン符号付順位検定　　*：$P < 0.05$、**：$P < 0.01$

表２　沐浴方法による固定位置の変化と沐浴できる思い

人（%）

		方法Ａ	方法Ｂ
固定位置が変化した	はい	11（68.8）	5（31.2）
	いいえ	5（31.2）	11（68.8）
実際に沐浴できると思うか	思う	12（75.0）	16（100）
	思わない	4（25.0）	0（0）

２）安楽性

表１の安楽性の項目で有意差が認められたのは、「固定している指への負担」（*P*=0.002）、「支えている腕の疲れ」（*P*=0.023）であり、いずれも方法Ａの得点が方法Ｂより高く、方法Ａの方が負担を強く感じていた。その他の「腰の疲れ」、「緊張した」については有意差が認められなかったが、どちらも方法Ａの得点がわずかに高かった。

３）安全性

表１の安全性の項目で有意差が認められたのは、「落としてしまう不安」（*P*=0.004）で、方法Ａの得点が方法Ｂより高く、方法Ａの不安が強かった。「腹臥位で顔が湯につかないか不安」は有意差が認められなかったが、方法Ａの得点の方が高く、不安が強い傾向がみられた。

表２の「実際の新生児でできると思う」については、方法Ｂは全員が「思う」と回答していたが、方法Ａは２名が「思わない」と回答していた。

３．自由記載欄から見た沐浴方法の違いによる洗いやすさ・安楽性・安全性の比較（表３）

質問紙の自由記載欄より、131の記述が得られた。131の記述の中から、主に沐浴方法による洗いやすさや安楽性、安全性について記載された93のデータを分析対象とした。その中から、特に沐浴方法における洗いやすさや安楽性、安全性について学生の意見がわかる記述内容の例を表３に示した。

１）洗いやすさ

児の洗いやすさについては、「洗いやすさ」「固定の難しさ」「体位変換の難しさ」「新生児との距離の近さ」の項目に含まれる自由記載がみられた。主に方法Ａについて、児頭を第一指と第三指で耳を把持することへの困難感、背面を洗うための体位変換の難しさについての記載がみられた。

２）安楽性

沐浴の安楽性については、主に学生の体感としての「疲労感や負担感」に含まれる記述がみられた。特に、方法Ａについて負担感を感じる意見が

表３　沐浴方法に対する学生の感想

	分類項目	方法Ａ	方法Ｂ
洗いやすさ	洗いやすさ	・腕や、足の四肢は洗いやすいと感じた。 ・方法Ｂより疲れにくいが、頭部の泡残りが心配になる。 ・耳をふさぐ指がキープできず、耳がふさげない時があり、耳にお湯が入らないか不安に感じた。	・頭を指で支える方法との一番の違いは、頭の洗いやすさだと感じた。 ・方法Ａに比べて沐浴を行いやすいと感じた。
	固定の難しさ	・頭を指で支えるので、沐浴中に手がすべって頭をぶつけてしまわないか不安になった。 ・児頭を固定している方の指に泡が残っていたのか体位変換をした後固定しにくかった。 ・手順などはそこまで難しくなかったので、頭を十分に支えることを意識すべきだと感じた。 ・児頭の支えている手の位置が定まらなかった。	・手順は方法Ａも方法Ｂも難しくなかったので頭が揺れるかどうかが、沐浴で重要視しなければいけない項目であることを再確認できた。
	体位変換の難しさ	・背面を洗うため、体位を変換した際に滑りそうになった	・腹臥位から仰臥位に戻す際に、頭を置く位置が定まらず、持ちかえてしまった。 ・方法Ａと比較すると、方法Ｂは、仰臥位から腹臥位、またその逆にすることが難しかった。 ・体位変換のやりかたも方法Ａより難しくなく、安心して実施できた。
	新生児との距離の近さ	・体と腕が方法Ｂよりも近いので支えやすかった。 ・角度を改めようとすると腕を伸ばすため新生児との距離が離れてしまうと感じた。	・新生児との距離、また新生児と浴槽の距離が近く、少し安心した感じが得られた。
安楽性	負担・疲労感	・全体に方法Ｂよりも沐浴中の疲れを感じた。	・児頭を固定した場合と比べて、腕や手の平に負担がかからずやりやすいと感じた。
安全性	安定感	・腹臥位にしたときには、湯に顔がつかないか心配であったが安定性や洗いやすさはとても良かった。	・今回の支え方は、安定感があったため洗うのに集中できた。 ・方法Ａは直接頭を支えているため多少力を入れても固定できていたが、方法Ｂでは、頭を腕に乗せている状態のため、力を入れて洗おうとすると頭部が揺れてしまう。 ・しっかり児頭を固定することが難しかったため、赤ちゃんに負担がかからないか心配になった。
	支える面の広さから感じる不安	・指２本だけでは少し滑ってしまい赤ちゃんが水につかってしまわないか不安があった。	・実施している側と児との接触面が多いから指だけよりも安心感があると思った。
	落下のリスク	・動かれてしまったら不安定になり落としてしまうのではないかと感じた。 ・体位を変換した際に泡が手に残っていて滑りそうになった。	・支えるときに左腕の部分を持っているため、洗う時に落としてしまわないか心配になった。 ・腕も同時に支えられるので、もし動いても落としにくそうだと思った。 ・沐浴中に新生児を落としてしまうのではないかという不安もなかったため、安心して実施できた。

目立った。方法Ｂについては、「児頭を固定した場合と比べて、腕や手の平に負担がかからずやりやすいと感じた。」など沐浴のしやすさや安楽さを述べた記述が目立った。

３）安全性

安全性に関する項目では、「安定感」「支える面の広さから感じる不安」「落下のリスク」に分類される意見がみられた。学生は児を支える面積が大きいほど安全性を感じ、落下のリスクが低いと感じていた。方法Ｂについて児頭の不安定さに関する記述も見られた。

Ⅳ．考察

１．学生が捉える沐浴のしやすさ

洗いやすさについて表１で有意差があったのは「固定のしやすさ」と「固定指の滑りやすさ」、安楽性で有意差があったのは「固定指への負担」と「腕の疲れ」であった。いずれも方法Ａの方が方法

Ｂよりも得点が高かった。また、表２から、固定位置が変化したと回答した学生は方法Ａについては約69％で方法Ｂについては約31％だったことから、学生にとって児頭を把持して固定する方法での沐浴は左肩関節を掴んで固定する方法よりも、明らかに固定が難しく感じており、固定指が滑りやすく、ずれることがあり、指への負担が大きいだけでなく腕も疲れると感じることがわかった。渡辺ら（2006）も学生は児の固定と把持に困難を感じていることを報告しており、実習に向けて特に強化すべき重要ポイントの一つであると述べている。この点について表３の学生の具体的な記述を見ると、方法Ａでは後頭部を固定している手によって後頭部の洗いにくさ、石鹸分の残りがあることによって指の滑りやすさ、児の耳に水が入らないように耳を把持することに困難感や負担感を感じていることが分かった。以上のことから、固定している手によって洗いにくい部分が生じることや石鹸分が残ることに対する対処方法や、耳に水が入っても心配はいらないことの指導を沐浴指導時に追加することによって学生の困難感の減少に繋がると考える。

一方、体位変換の難しさについて表１では有意差は無かったが、方法Ｂの方が方法Ａよりもわずかに得点が高く、学生にとっては左肩関節を掴んで固定する方法の方が体位変換を難しく感じる傾向があるように思われる。この点について表３の学生の具体的な記述を見ると、個人差はあるが左肩関節を掴んで固定する手を左手から右手へ持ち替える際の手技に戸惑っている可能性があることと、児頭を把持していないため児頭が揺らいでしまうことの心配が生じると推察される。学生に方法Ｂの指導をするためには、これらへの対処方法を今後、検討する必要があると考える。

２．それぞれの固定方法における沐浴の安全性

安全性ついて表１で有意差があったのは「落とす不安」方法Ａの方が方法Ｂよりも得点が高かったことから、学生にとっては児頭を把持して固定する方法での沐浴は左肩関節を掴んで固定する方法よりも、新生児を落下させてしまう不安を強く感じていることが明らかになった。この点について表３の学生の具体的な記述を見ると、個人差はあるが、方法Ｂの方が方法Ａよりも安定感を感じ、落下のリスクなどが低いと感じている学生が多かった。その理由としては、方法Ａでは指２本での固定だが、方法Ｂでは左肩を手のひらと指全体で掴むため接触面が広いことを挙げていた。肩から腕まで同時に支えられるため安定感があり、実際の新生児の場合に動いても落下のリスクはあまり感じることなく、安心して沐浴できると感じていることが窺われた。

ただし、今回、学生の感想から明らかになったこととして、方法Ｂは方法Ａのように児頭をしっかり把持しないため、確実な固定とは言えないということである。方法Ｂでは、「頭を腕に乗せている状態のため、力を入れて洗おうとすると頭部が揺れてしまう」など「児頭の不安定さ」にあたる記述が多くみられた。首が座っていない新生児を対象とした沐浴では、児頭と頸部を安全に固定することが求められるため、方法Ｂにおける児頭の安定性については、学生の主観のみならず、画像分析を行うなど、児頭の安定性についての分析を加えていくことが必要だと考える。

全体としてみると、学生は方法Ａよりも方法Ｂの方がより洗いやすく、負担感が少なく、安全性も高いと判断していた。方法Ｂであれば実際の新生児を沐浴することができると全員が感じているのに対し、方法Ａでは16名中２名ができると思えていないという結果から、学生の沐浴に対する自信は方法Ｂの方が高めることができるのではないかと考えられる。

３．沐浴方法の教授方法の改善案

現在、多くの看護師養成機関で教授されている沐浴の指導方法は児頭を支えて行う方法Ａが主流であり、実際の医療機関で母親及び家族への育児技術の指導法としての沐浴方法についても、方法Ａで指導がされていることが多い。その理由としては、新生児は未定頸の状態であるため、頸部を支える方法である方法Ａの方が安全性が高いと判断されてのことだと推察される。しかしながら、本研究の結果からもわかるように方法Ａにおける児の固定については、方法Ｂに比べ、洗いやすさ・

安楽性・安全性からも学生にとってより負担が高い傾向がみられた。

今回の研究への参加で学生は、方法Ａと方法Ｂ両方の沐浴方法を体験することで、沐浴方法には選択肢があることを知ることが出来たのではないだろうか。今回研究に参加した学生の多くは方法Ｂの方が安定性が高く実施しやすいと回答していたが、少数派ではあるものの方法Ａの方がよいと感じた学生も存在する。また、児はいずれ成長発達する存在であることを考えると方法Ａの児頭を固定する方法から方法Ｂへ自然と変更していくものと考えられるため、中長期的には、方法Ａと方法Ｂ両方の沐浴方法を知っておくことも必要なことと考えられる。

沐浴技術は、家族への指導技術の一つでもある。学生が指導に当たる際、自信をもって家族へ指導できるようにする必要があると考える。方法Ａと方法Ｂ共に沐浴方法について学生が困難さを感じる点が明らかになったため、それらを解決して沐浴技術の習得過程が効率的に進むように教授方法を改善していく必要がある。

具体的な改善案としては、例えば、「洗い残し、石鹸分の残りへの対処法」については、体位変換などによって介助者の固定部位が変化した際に洗いにくかった部分を洗う、石鹸分が残ることに対しては、滑りやすさにもつながるため、ガーゼなどを使用して充分に石鹸分を洗い流すことを説明する。

また、方法Ｂによる体位変換時の児の左腋下の持ち替えにくさについては、左右両方の腕で児の左腋下を挟むように固定して持ち替える方法を予め見せ説明する。また、洗髪時の児頭の不安定さについては、児頭を洗う方向を前頭部から後頭部の方向にすることで、児頭の揺らぎを少なくでき児頭が安定すると考えた。これらについても実際に学生にやって見せながら説明を加えると効果的であると考えられる。

その他、方法Ｂを安全、安楽に行うための改善方法としては、服を着たままの児を脇に抱え児頭を把持し、児頭を洗う方法も考えられるが、この方法は、学生にとっては難易度が高いと考えられるため、一例として教員が実演し、学生の沐浴技術が向上してきた後の実施を検討したい。

いずれにせよ、学生が沐浴技術を苦に思うことなく、児への愛情を持ちつつ沐浴を実践してほしいと考える。その為にも、方法Ａと方法Ｂ共に改善すべき点を改善し、学生が自ら沐浴方法の選択ができるように、方法Ａだけではなく方法Ｂも取り入れてみるのも良いのではないかと考える。

４．本研究の限界と今後の課題

本研究の限界としては、対象者が16名であり、AB群とBA群を同数にすることができなかったため、一般化することには限界がある。また今回は、学生の主観によるデータであり、児頭の固定に関する客観的データの分析には至っていないことと、人形を用いているため、実際の新生児での沐浴を実施した際には異なるデータが得られる可能性も否定できない。また、初めて行う沐浴に対する感想であって、回数を重ねると評価が変化する可能性も考えられる。

今後は、実際の新生児に協力を得たデータ収集や、客観的データの分析など、データ数を蓄積し、より安全で安楽な沐浴の指導方法を検討し、沐浴の技術演習に関する教授方法の改善に役立てたい。

Ⅴ．結論

Ｃ大学の看護学科２年次生16名を対象とし、クロスオーバー試験により２通りの沐浴方法を実施中の動画撮影と、実施後に洗いやすさ、安楽性、安全性の観点から質問紙調査を行い、比較・分析したところ、以下の結果を得た。

１．洗いやすさと安楽性では、「固定のしやすさ」、「固定している指の滑りやすさ」、「固定している指への負担」、「支えている腕の疲れ」の得点で有意差が認められ、学生は方法Ａの方が方法Ｂよりも固定が難しく感じており、固定指が滑りやすく、ずれることがあり、指への負担が大きいだけでなく腕も疲れると感じていた。

２．安全性では「落としてしまう不安」の得点で有意差が認められ、学生にとっては方法Ａの方が方法Ｂよりも、新生児を落下させてしまう不安を強く感じていた。

３．方法Ｂは方法Ａのように児頭を把持しないた

め、児頭を確実に固定できず、洗う際に頭部が揺れてしまう「児頭の不安定さ」を感じていた。以上のことから、方法Ａと方法Ｂ共に沐浴方法の問題点が明確になったため、どちらの沐浴技術も習得過程が効率的に進むよう教授方法の改善のために生かすことが今後の課題と考える。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に心より感謝いたします。

Ⅵ. 利益相反

記載すべき利益相反はありません。

引用・参考文献

荒川直子，小西小夜子，中西真美子，他（2006）．臨地実習における沐浴技術の安全教育の一考察 看護学生が起こしやすい看護事故のリスクとは．九州国立看護教育紀要，8(1)，11−18.

檀原いづみ（2010）．学内演習と臨地実習における沐浴実施の評価により学内演習に必要な技術の検討．インターナショナルNursing Care Research，9(2)，149−154.

後藤智子，佐藤珠美，猪谷生美，他（2015）．新生児沐浴e-learningの授業への活用と効果．日本赤十字九州国際看護大学紀要，14，13−20.

細坂恭子，茅島江子，抜田博子（2015）．新生児清潔ケアの実態とケア選択の探索－混合研究を用いて－．日本助産学会誌，29(2)，240−250.

伊藤良子（2009）．新生児期実習における沐浴実施学習体験での看護学生の学び．京都市立看護短期大学紀要，34，83−89.

今田葉子，斎藤真，氷見佳子，他（2009）．新生児の沐浴技術における児頭固定の早期習得に関する研究．母性衛生，50(1)，165−173.

加藤千恵子，結城佳子，鈴木敦子，他（2009）．家庭での新生児の沐浴をイメージできる視聴者教材の開発－看護学生の評価による新教材と既存教材の比較－．名寄市立大学紀要，3，59−67.

行光美音子，氏平美智子，木下照子，他（2004）．母性看護学臨地実習における看護学生のヒヤリ・ハットまたは医療事故体験の実態調査．日本看護学会論文集：看護教育，35，24−26.

信井由希子，堀内輝子（2010）．新生児の沐浴における技術習得方法の検討－技術評価を取り入れて－．湘南短期大学紀要，21，73−77.

浅井宏美，江藤宏美（2016）．第４章 新生児のニーズとケア２身体の清潔．横尾京子（編），助産師基礎教育テキスト（186−204）．東京，日本看護協会.

鷲尾弘枝（2011）．沐浴技術に対する学生の気持ちと技術困難感を中心にした沐浴技術教育の考察～２回の沐浴演習後の質問紙調査より～．畿央大学紀要，8(2)，57−64.

渡辺恭子，新小田春美，北原悦子（2006）．母性看護学演習における学生の評と課題沐浴技術演習の評価から．九州大学医学部保健学科紀要，７，83−94.